

19世紀末から20世紀初頭の帝室劇場のバレエ・オペラ研究
(「スラブ・ユーラシア地域(旧ソ連・東欧)を中心とした総合的研究」報告書)

平野恵美子

1909年パリ初演で大成功を取めたバレエ・リュスの西欧での活動とその意義は、これまでR・バックルやL・ガラフォラら欧米の研究者達によって詳細な研究が進められて来た。だが西欧デビュー以前に彼らを育てたロシア帝室劇場のバレエに関する研究は、ロシアのV・クラソフスカヤの著作を除けばほとんどみられなかった。そのクラソフスカヤの著作もソ連時代に出版され、ある種の制約と偏りがあった。さらにフォーキンやカルサヴィナ等、バレエ・リュスの主要なメンバーの多くが1910年代の前半まで、バレエ・リュスと帝室劇場の両方の活動に携わっていたが、西欧におけるバレエ・リュスの活動がロシアでどのように受容されていたかということとはよくわからなかった。

彼らが革命後の亡命者であったということ以外に、帝室劇場のバレエに関する研究がこれまであまり進んでいなかった主な理由として、ほぼ全ての記録が記された『帝室劇場年鑑』がロシア語で書かれていること、またこれまでロシア国外での閲覧が不可能に近かったということが挙げられる(ただし2008年末に早稲田大学演劇博物館で購入され、日本国内での閲覧が可能になった)。私は博士論文でこの『帝室劇場年鑑』を主たる一次資料として、1900年代のロシア帝室劇場のバレエとオペラの上演実態に光を当てた。当時の帝室劇場総支配人だったテリャコーフスキーの日記や関係者の回想録の他に、同時代の雑誌に掲載された論文等も用いたが、舞踊評を取り上げた新聞は Петербургская газета と Петербургский листок の2紙が中心だった。バレエ・リュスの関係者の多くが回想録を著しているが、それは時代を経て書かれたものであり、多かれ少なかれ当事者は自分達の都合の良い方向に事実を歪曲する傾向があった。私は上述の2紙以外で当時の帝室劇場で上演されていたバレエやオペラの批評が載った新聞を探していたが、日本国内でそうした文献を所蔵し閲覧できる場所を見つけるのは大変難しかった。私は当該のプロジェクトに採用して頂き、2011年1月末にスラブ研究センターに滞在して調査を行うことができた。同センターの図書館には Речь 紙があり、バレエ・リュスが西欧で初公演を始めた1909年から調査を始めたところ、ベヌアラ主要人物の寄稿の他に、ディアギレフ率いるバレエ・リュス西欧公演の様態を伝える記事を見つけることができた。これらを読むと、ロシア国内でバレエ・リュスのメンバーが高く評価されていたと同時に、西欧公演での成功は冷静な口調で伝えられていたことが窺える。この調査結果はいずれ論文の形でまとめる予定でいる。

私の2011年1月のセンター滞在は仕事の都合で非常に時間が限られてしまい、2011年3月に再度、同センターを訪問する予定だったが、この度の東日本大震災の影響で予定をキャンセルせざるを得なくなった。しかしながら望月哲男所長を始め、同センターの皆さんが私の訪問の延期を大変快く承知して下さい、2012年度中に再度訪問し調査させて頂く予定である。貴重な資料を閲覧させて頂けること、また大変な寛大な処置に心から感謝を申し上げたい。